

地域日本語教育が育む異文化間能力

—対話を通じて—

中川祐治（福島大学）

1. 地域日本語教育と異文化間能力

地域日本語教育は、「多言語多文化を背景とする住民を含めた地域社会形成のための、地域社会を基盤とした多面的重層的なシステム」（日本語教育学会編，2008: 13）であるとされ、また、「地域社会と密着し生活を基盤として日本語学習を位置づける社会型日本語教育」であって、「日本で暮らし、働く外国人の日本語学習を支援する活動は、大学や日本語学校で行われる学校型の日本語教育と区別」されるものであるといった指摘もある（日本語教育政策マスタープラン研究会，2010: 21）。

事実、実際の場合は、いわゆる日本語ボランティア教室という名称で、ボランティアの手によって行われるボランティアな市民活動であって、参加者が一定ではない、多くは1週間に1回、毎回2時間程度といった時間的制約がある、学期などの時間的区切りがないといった、非意図的、非計画的な営みであり、その性質は、いわゆる「教育」よりも「福祉」の領域にちかいものであるといえる。そこで育まれ育もうとする能力は「文脈や状況と切り離れた個人内に獲得・蓄積された知識や技能をとらえる静的で個体主義的な能力観ではなく、社会の具体的な状況において他者との関係性の中で発現する動的な能力」（日本語教育学会編，2008: 24）としてとらえるべきものであって、その能力を生かしながら「異なる言語文化背景を持つ者同士が関わりの中で共通に抱えている問題を解決していくことが必要であり」、「現実における問題を解決するためには、協力関係を作りその関係を維持して行くための知識やスキルが必要となる」（日本語教育学会編，2008: 25）だろう。

また、先行研究によると異文化間能力とは、たとえば、「個々の異文化的知識、技能、態度にもとづき、異文化的状況で効果的かつ適切にコミュニケーションをとる能力」「参照枠を適切に変更し、文化的コンテクストに行動を適応させる能力」（Deardorff, 2006）、「異文化環境下で仕事や勉学の目標を達成し、文化的・言語的背景の異なる人びとと好ましい関係をもち、個人にとって意味のある生活を可能にするための能力や資質」（山岸，1995）といったものがあげられているが、これらは地域日本語教育の場で育まれ育もうとする能力に重なるものであるいえよう。では、これらの能力を育むにはどのような方法が考えられるだろうか。Byram(2008)は「相互文化的出会いについての自分誌」を記し分析することの教育的有効性を主張する。日本語教育学会編(2009)においても、地域日本語教育における「評価」的視点の必要性に言及する中で、活動の記述・分析にもとづく自己評価の重要性を説く。いずれにしても、そこには自らをふり返り、省察する行為が要となる。

2. リサーチ・クエスチョン・研究方法

本発表では、地域日本語教育の参加者のうち支援者に着目し、リサーチ・クエスチョンとして「地域日本語教育の文脈において異文化間能力はどのように育まれるのか」を設定し、あわせて、地域の日本語支援者は、実践の中でどのような「暗黙知」「実践知」を用いているのか、自分自身の実践についての省察を通して、いかに実践を捉え直し、どのように実践をつくりかえることができるのかといった点についても言及する。実際の方法としては、5人の調査協力者に対してエピソード記述を依頼し、それにもとづくインタビューを行う。そのインタビューを言語データとしてSCAT法による分析を行い、ストーリーラインを描くことによって上記のリサーチ・クエスチョンに迫る。自らの実践についてふ

り返り、それを他者(発表者)に語ること、対話という相互行為を通じて引き出され、あるいは掘り出され、見出された能力を、地域日本語教育が育む異文化間能力として整理する。

3. 結果

今回の発表では、地域日本語教育における、狭義の場(学習の場)である日本語ボランティア教室ではなく、広義の場(協働の場)である地域社会における活動、具体的には、映画制作活動からのエピソード／インタビューから浮かび上がった A さんの「物語」についての報告を行う。

支援者 A さんは、留学生 O 君、K 君を誘い、映画製作の活動に共に参加する。極度の人見知りである O 君については、A さんはまさか参加するとは思っていなかったが、3 日間の活動の中で、最初は音響班で音響機器の操作を教えてもらい、さらに謎の外国人 O という役を与えられ、そこで周囲が驚くほどの熱演をする。O 君は、この映画製作活動の中で自分の居場所を見つけ、大きく変化する。その結果、A さんは、O 君に対するこれまでの認識を一変させる。他方、K 君は、日本語のレベルは O 君よりも高く、これまでも地域の活動に参加した経験があることから、A さんは安心していましたが、周囲に溶け込もうとせず、次第に居場所を失ってしまう。A さんは、ハラハラして何度も口出しをし、そこで自分の中に母親のような感情が芽生えていることに驚くが、自分自身の本来の業務、立場との間に齟齬が生じ、そのため、彼への対応をめぐって葛藤が生じることとなる。

以上の「物語」から、能力に関する知識、技能、態度に関わる諸要素を見出すことができた。さらに、これらの能力は、【ものづくりの知識】【地域社会の理解】【ファシリテーションスキル】【デザインする力】【役割の組み換え】【シチズンシップ】といった能力としてモデル化し、地域日本語教育の場に転用することが可能となる。

4. 考察・成果

以上を、本年度のテーマである「異文化間能力を生かす」という観点からみると、「生かす」という概念には、異文化間能力の概念をプログラムの PDCA に生かして活用するという側面と、異文化間能力の概念をふり返りや気づき、意味づけの視点として活用するという側面があると考えられるが、地域日本語教育の文脈では後者の視点がより重要となる。即ち、支援者がアプリアオリの、何らかの意図や目的をもって行う行為よりも、結果として立ち現れる影響や効果に着目する必要がある。しかしながら、大半の支援者は、それらに意識を向けることは少なく、それらは気づかれることのないまま、日々の活動の中に埋没する。本研究では、支援者との対話を通じて、それら埋没しかけた出会いや体験に気づきや発見をもたらし、解釈、関連づけを行うことによって、異文化間能力の観点から意味づけを行うことができた。またこれらは、地域日本語教育の場において、その環境下のもと相互行為的に育まれるものであり、さらに対話という省察的営みを通じてメタ的に、支援者と発表者の相互においても育まれる能力であると考えられる。

〔参考文献〕

日本語教育学会編(2008)『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発—報告書—』／日本語教育学会編(2009)『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発—報告書—』／日本語教育政策マスタープラン研究会(2010)『日本語教育でつくる社会 私たちの見取り図』／ココ出版／山岸みどり(1995)「異文化間能力とその育成」渡辺文夫編著『異文化接触の心理学』川島書店／Byram, M. (2008) *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Multilingual Matters. [細川英雄監修『相互文化的能力を育む外国語教育』大修館書店]／Deardorff, D. K. (2006) *Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization*. *Journal of Studies in International Education* 10(3), 241-266.